かなめいし・くさびいし

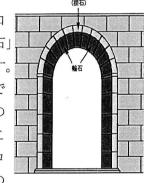
キーストーン(要石・楔石)は何か! ~あなたが支えているもの、支えられているもの~

宮下佳廣

千葉大学大学院園芸学研究科では多方面の知識を学びました。園芸・造園という専門分野から生物学、建築学へと学びを広げ、それぞれの知識がつながることを実感しました。その中で特に印象に残っている「キーストーン(要石・楔石)」について紹介します。

生物学では、生態系において個体数が少なくてもその種が属する生物群集や生態系に及ぼす影響が大きい種を「キーストーン種」と呼びます。例えば、ラッコは大量のウニを捕食するためウニの増殖は抑えられますが、ラッコがいなくなるとウニの数が増え、そのエサとなる海藻が多く採食されるため、海藻が減少し、やがて海底が荒廃し裸地化していきます。その結果、海藻を採食しているウニ以外の生物も生息できなくなります。この場合のラッコはキーストーン種となります。

また、建築学では、西洋に残る多くの石造りの建築物の入り口や門はアーチ状になっており、そのアーチは中心にある「要石」により構造が保たれており、その石をキーストーンと呼びます。このキーストーンを最初に発見・発明したのは古代ローマ人であり、それまでは四角な門しか作ることができず、試行錯誤の末アーチ構造の最後に、この楔形のキーストーンを打ち込むことで完成したといわれております。ローマ帝国となった後、ローマ橋・ローマ水道・凱旋門等が作られ、今日迄、世界各地の



建造物にキーストーンが遺されております。日本では、扇子の骨を閉じている金具を「金目(かなめ)」と呼び、骨がバラバラにならないための役割を担っています。煉瓦積の職人たちは、この要石を「エンマ」と呼び、嘘をついたら人間の舌べらを抜くと恐れられた閻魔大王になぞらえています。さらに、野球用語では、二塁をダイヤモンドの頂点に見立て、二塁手と遊撃手を「キーストーンコンビ」と呼び、いずれも要所を支える言葉として用いられております。

私たちは日々多くの出来事や情報に囲まれているため、時にいちばん肝心なものを 見失うことがあります。その際、広く全体像を見ること、長い目で考えることなど物 事の捉え方について心掛けるべきことは数多くありますが、とりわけ、直面する問題 のキーストーンを見逃さないことが重要です。まずは、公私を含め自分の身の回りの 物事のキーストーンは何か、それは何により支えられているのかと事象の本質を見抜 く目を養っていただきたいと思います。

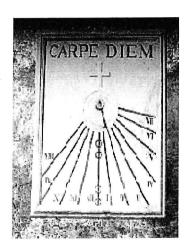
感想・ご意見など ym2041@axel. ocn. ne. jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

今という時を大切に使おう! ~新しい事業年度を迎えて~

宮下佳廣

新しい事業年度を迎えます。私自身、企業人時代を振り返ってみても、やはり新年度を迎えるこの時期は、前年度の反省を踏まえ新たな課題に向かう区切りの時間として、緊張感のある日々であったことが思い起こされます。

文明の進歩には、「時間」という概念が大きな要因であるとはよくいわれることです。紀元前3000年頃に栄えたメソポタミア文明を興したシュメール人が日時計を考案し、これから暦を製作したことが、時間の起源と言われています。この日時計に古くから刻印されているのが「カルペ・ディエム(Carpe diem)」というラテン語です。古代ローマの詩人ホラティウスの詩に登場する語句で「一日の花を摘め」、「その日を摘め」と訳され、「今という時を大切に使え」と言おうとしています。また、この言葉は、現在では時計や雑貨のブランド名に使われ、アメリカ映画の名作「いまを生きる」という邦題にもなっています。



同様に、日本にも、道歌(道徳的な教えをわかりやすく詠み込んだ和歌)の「さしあたる今日の事のみ思え ただ帰らぬ昨日知らぬ明日の日」や、茶道の「一期一会」という言葉があります。「今という時に真摯に向き合う」ことの大切さは、洋の東西を問わず語り継がれています。

フレッシュな新人が入社してくる新年は我々にとっても大切な節目です。未来を担う若い人を迎え入れることは大変うれしいことで、新たに社会人としてスタートをきる彼らは、緊張する日々を過ごし、見るもの聞くものすべてが新鮮で、最初は先輩の一挙手一投足を見習います。また、それは手本となる私達先輩社員にとっても緊張感を伴うこととなるでしょう。先輩社員のみなさんは、この新鮮で貴重な機会に、あらためて若者・後輩を育てる責任の重さを再認識し「仕事とは何か」を考えてほしいと思います。みなさん一人一人が、日々それぞれの花を摘む(今という時を大切に使う)ことが千代田の大きな花束となり、ひいては千代田がものづくり日本に貢献することになるのです。今日一日を大切に!

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 宛、お寄せいただけたら幸いです。

ローカルナレッジに学ぶ ~先住民・古人・職人・現場の知~

宮下佳廣

私の郷里北海道でアイヌ民族の研究をしている友人から、「イラムカラプテ」という言葉を教えられました。このアイヌ語は、日本語の「こんにちは」や英語の「Hello」のように挨拶の際に用いられ、意味が「あなたの心にそっと触れさせて下さい」であると聞かされ、その言葉の奥深さが今でも心に残っています。

ネイティブアメリカン(インディアン)やアボリジニ等の先進国の先住民や発展途上国の原住民がもっている特定の地域、文化、社会に固有な知識を「ローカルナレッジ(Local knowledge)」といいます。それは、専門家のもっている科学的知識に対比させて、彼らがもっている経験的・実践的・伝統的な知恵のことであり、「イラムカラプテ」の言葉のように、今の現代人がそれらから学ぶべき点が多くあるように思います。シャーマン(薬草治療師)は、このローカルナレッジの例として良く知られています。熱帯林に豊富にある薬用植物の知識は、原住民のシャーマンによって伝承されており、いくつかの世界的な製薬企業はその貴重な知識を受け継ぐべく、植物学者たちを派遣して弟子入りさせています。その結果、彼らに採取させた薬用植物から効率的に新薬を開発することができ、マラリアの「キーネ」やリウマチの「キャッツクロー」等の特効薬が生まれています。

日本においても、琵琶湖周辺に住む人々は、昔から湖水やそこに流れ込む川の水を汚さないため、集落を流れる水路をわざと蛇行させ、できた窪地に汚物を沈殿させ、それを定期的に汲み上げ肥料として活用しています。また、食器や食材を洗う川の洗い場に鯉を飼って、ご飯つぶなどを餌として食べさせています。このような古人の知恵により家庭生活から出る排水・廃棄物のほとんどが有効に再利用され、結果として水域の汚染を防いでいます。最近の事例では、小惑星からのサンプル持ち帰りを目指して昨年12月に打ち上げられた探査機「はやぶさ2」は、大手メーカーに加えて多くの町工場の職人たちの経験や勘、そして熱い思いも載せ、日本のものづくり技術の粋が結集して作られております。このような職人の知恵や技術も広い意味では、ローカルナレッジといえましよう。

皆さんが日常接する工場の現場は、科学的な専門知識とローカルナレッジが融合した最前線と呼べる場所と思われます。今、製造業では技術の伝承が大きな課題となっています。 先輩の熟練の知恵や技を、若い後輩にいかに引き継ぐかが企業の命運を左右するといっても過言ではありません。千代田には「現場に強い」という伝統があります。皆さんが現場で経験してきた「現場の知」を、お客と共に考え伝承していくことは大変意義あることであり、ひいては日本のものづくりに貢献することにつながっていきます。

皆さんも、それぞれが受け継いでいる家風や校風、そして千代田の社風によって培われ た自分自身の「ローカルナレッジ」への想いを新たにしてはいかがでしょうか?

感想・ご意見など $\underline{ym2041@axe1.ocn.ne.jp}$ 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

懐かしい未来 〜創業者を想う〜

宮下佳廣

先月末に福岡県の宗像市で開催された国際環境シンポジウムに参加し、帰路は大分に入り営業所の皆さんと懇談をしてきました。その間、宗像の赤間に立ち寄り、17年ぶりに海賊と呼ばれた男(出光興産創業者 出光佐三)のお墓参りができました。墓前で目を閉じ、生前の創業者の多くの言葉を思い出しました。まず、浮かんだのは全国の支店の会議室に掲げられていた額に書かれていた「敬神崇祖」という言葉でした。意味するところは、神を敬い先祖をあがめる(尊いものとしてあつかうこと)というもので、正直、現役時代は全く関心がない言葉でした。しかし、千葉大での広井先生との出会いから始まった「鎮守の森の活動」を通して、敬神とはただの宗教観ではなく日本人特有の感性であることを学びました。グローバル化とITが席捲している今日だからこそ、私たちの先祖が残してくれた多くの有形・無形の文化を見直す時が来ています。

スウェーデンの女性環境活動家へレナ・ノーバーグ・ホッジは、ヒマラヤの村ラダックで地域の自立や未来を考え、「懐かしい未来(Ancient Future)」を提唱しています。彼女は、グローバリゼーションの波にさらされた辺境の地ラダックの未来は、そこに息づく深い伝統的な知恵こそ、新たな未来へ進む鍵であると示唆しています。日本でもこの考え方に共感する自治体が増えてきており、「確かな、豊かな、美しい未来への旅は懐かしい過去にある」をテーマに掲げる地方都市が出ています。俳聖松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で見出した、俳諧の理念といわれる「不易流行~不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」は良く知られていますが、この「不易」こそ未来につながる精神といえます。

千代田は新体制を迎えます。千代田の創業者は、60年前、経営理念の冒頭に「会社とは命ある有機体である」として、利益性・社会性・人間性の三点のバランスがとれた経営体を目指すと述べています。そして、経営とは、新しい価値の創造を目指し、そこに人間の喜びと幸福を見出す過程であり、「人間の探究・人間の発見」に尽きると結んでいます。この言葉は、千代田の未来を考える時の根本の精神であり、これから直面する多くの難関に立ち向かう原点になります。芭蕉の言葉を千代田に置きかえれば、「不易」は千代田創業の経営理念であり、「流行」という新しいビジネスモデルを創造しようとする未来に、懐かしく蘇ってくるものであることをみなさんと共に噛みしめたいと思います。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

「日本に残しておきたい会社」を目指して ~香気ある「志」を受け継ぐ~

宮下佳廣

この7月、千代田は30年ぶりにトップが交代し、新しい体制がスタートしました。 企業の寿命は一般的に30年と言われる中、創業65年を迎えることは、「三方よし(売 り手よし、買い手よし、世間よし)」に加えて、「社員よし」の四本の柱が今日の千代田 を支えてきた賜物と思われます。そして、この柱の基礎となっているのが、創業以来の 「日本のものづくりの現場で、新しい価値を創造する」という志です。

『竜馬がゆく』等、男の志を描く作品の多い司馬遼太郎の長編小説に、江戸後期に淡路島に生れ、悲惨な境遇を乗り越え、後に蝦夷・千島の海で活躍する豪商となった高田屋嘉兵衛の生涯を描いた『菜の花の沖』があります。その一節に「わけ知りには、志がない。志がないところに、社会の前進はないのである。志というものは、現実からわずかばかり宙に浮くだけに、花がそうであるように香気がある」があります。また、この「志」に近い言葉として「夢」があります。その違いとして、「志」は社会的であり、持続的で、当然そこに意志があり、「夢」はどちらかといえば個人的なものであり、瞬間的で、想い・願望に近いものと考えられます。少子高齢化・人口減少社会という、時代の大きな曲がり角に差し掛かっている今こそ、私たちは、日本人として、また社会人、企業人として、「夢」を追うだけではなく、「志」のある生き方をしていきたいものです。

時代が大きく変化する中で、これからも千代田が「日本のものづくりの現場で、新しい価値を創造する」という高い志を貫きながら持続的に成長するためには、新経営陣が創業者の示した「人間性のある企業」という香気ある経営理念を今一度肝に銘じ、具現化して行く不断の努力が重要です。そして、みなさんが多忙な日常業務の中で、日々現状の業務に問題意識を持ち、改善し、さらに創造的な仕事を掘り起してゆかなくてはなりません。この両輪が噛み合い、実践されていく限り、どんな難関でも乗り切っていけ、「千代田の未来」が約束されるでしょう。

この度の千代田成長「第Ⅱ期」のスタートにあたり、千代田が、やがて「日本に残しておきたい会社 100 選」に選ばれる優良企業に発展することを期待してやみません。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。